説教余滴、2019 年 5 月 12 日「続・オリーブ」

会堂正面東側、郵便ポストの脇にオリーブの鉢があります。このことは、昨年８月１２日の余滴に書きました。現在、たくさんの花芽がついています。自家受粉はしないようです。今のところ、オリーブの実は期待薄です。
オリーブは、モクセイ科オリーブ属の常緑樹です。原産は地中海沿岸地方、又は小アジアと言われます。月桂樹（ローリエ）とオリーブでは、葉の形が全く違います。月桂樹はクスノキ科で、普通の葉っぱ型ですがオリーブは柿の種を伸ばした細身です。

オリーブは冬の時期に実をつけます。この時期は他に食べるものがないので、油分を多く含んだ実で動物を誘うのだそうです。味の方はあまりおいしくないとか。絞った油は、人類史上最古の食用オイルと言われ、6,000 年前から使われていたと言います。スペイン（約 80 万トン）やイタリア（約 50 万トン）、ギリシャ（約 20 万トン）が主産地で、日本では小豆島（約 40 トン）が有名ですね。

オリーブ冠は、そもそも、古代ギリシャの英雄ヘラクレスがオリンピアの庭に植えたオリーブの枝を、オリンピックの勝者に与えたことが由来。2004 年のアテネオリンピックでも、優勝者には金メダルとともにオリーブ冠が与えられたそうです。
一方、ゲッケイジュは文化芸術の神・アポロンの聖樹とされていて、その枝で作った月桂冠は詩人や文人の頭上を飾るもの。ノーベル賞受賞者が Nobel Laureates（ノーベルのローリエを冠された者）と呼ばれるのも、そういう意味からだそうです。
スポーツではオリーブ冠、文化では月桂冠というわけです。

オリーブが平和のシンボルになったのも、都市国家どうしで戦争を繰り返していた古代ギリシャにおいて、オリンピック開催中だけは休戦にしたからだそうです。